

ハワイにかかる虹の彼方に

福島県立医科大学附属病院 後期研修医 盛 彬子

刻々と夜のベールに包まれていくハワイを眺めながら、私に訪れたこの一週間の幸運を振り返り噛み締める。同時にこれからの歩むべき己が医師としての道を思い描きながら・・・

寒々と降る雨に滑走路を照らすライトが滲む羽田新国際空港を発ち、不安と期待とを道づれに日付変更線をこえハワイに降り立つ。そこはブーゲンビリアが色濃くにおう異国。常夏の国といえどもどこか日差しに11月らしい寂しさを感じるのは、日本空軍が襲撃したパールハーバーを偲べばこそだろうか。そんなハワイの為せるエキゾチックな研修は印象的な出会い、inspire されることが数多くあった。

一つは Dr. Tokeshi との出会い。

Family medicine doctor である彼は沖縄出身でありながらハワイでクリニカルを持ち、こよなく愛する武士道精神を根底に日々厳しく己と医療に向き合っておられた。彼の professionalism は、一に心構え、二に身構えである。心構えとは、” Doctor is a servant.” ごとく、医療者は患者さんより常に立場を下に据えなくてはならないということ。身構えとは、” 無構え” でいること。構えはあるのだが、患者さんからは構えを悟られないように接することで、患者さんを医師側に飛び込みやすくさせることである。医療に際しては、患者さんの心を解くことが大事だと学んだ。さらに” Doctor’ s elements= 五徳”。①仁：患者さんの気持ちを察すること。②義：何よりも患者さんを第一に考えること (sleeping や eating は optional であって requirement ではない)。③礼：患者さん、co-medical、医療器具、両親、先生に対し尊敬の念を持つ。④知：勉強をおろそかにしない。⑤信：患者さんを信じる。この五つを常に意識下におく。こういった医療精神論のようなものは、医師として当然と持つべきものであり、学生時代も医師になってからも他から聞く機会がなかったと思われるが、改めて教えられると、非常に初心に帰らされ身の引き締まるお話であった。大学の講義という形でなく、臨床の場で臨床医師から聞く話は、非常に重みがあり、その重要性が真に迫って感じられた。また、Dr. Tokeshi は語るだけでなく、自ら実践しており (朝は 4:30 には病院に行き、決して患者さんを急くことなくじっくり話を聞きながら回診をし、ネット、医学雑誌などで常に最新のことを幅広く勉強されておられた)、その内側から滲み出る穏やかさや安心感は日々の努力を彷彿とさせた。

二つめは Dr. Machi との出会い。

Dr. Machi は沖縄中部病院で研修され、現在 Kuwakini 病院で外科医として活躍なさっている。医師業以外にも「美しき日本の医療」などの著書をされており、研修医向けの医療マニュアルも出されている。経歴から私はがっしり怖そうな人物を想像していたので、その飄々とした物腰の柔らかさに虚を突かれたが、お話を聞くとフットワークが軽く考えが柔軟で、なるほど日本とハワイをまたにかける人物だと

思った。常に新しいことに挑戦する気持ちをお持ちで、今も日本への新たな研修病院設立に行脚している。現在の日本の医療の良いところ悪いところを考え改善していこうとするビジョンと実行力には驚かされた。教育やコミュニケーションスキルを重んじており、日本のいわゆる”屋根瓦式”の教育方法をうまく活かす研修制度・医学教育を語られていた。医学部入試で積極性があり、自分の意見を明確に述べられる学生を選抜すべきとおっしゃっていた。私としては、自己表現はもちろん大事であるが、そこにばかり注目するともっと大事なことを見落とす気がしてならない。教育、コミュニケーションに関して改めて考えさせられた。

三つめは Dr. Okado との出会い。

予定では研修中休みのはずであった 11 月 2 日に入った Kuwakini 病院での外科研修で出会った女性外科医で、その華奢な外見からは想像つかないほどアクティブに手術室と病棟とを駆け回っていた。ハワイでは外科医の 30%が女性とのことで、生き生きと充実した外科医生活を送られているようであった。あまり詳しい話はお聞きできなかったが、将来に迷う私に彼女の姿は勇気をくれた。

四つめはハワイ大学医学部 1 年生との出会い。

11 月 4 日ハワイ大学での PBL(problem-based-learning)研修で模擬をしてくれた学生さん達。PBL とは、私たちが 3 年時に履修したチュートリアルを深めたもので、提示される症例の現症、患者背景、臨床経過等を順序よく読み進めていながら、症状から疾患を類推し、検査、治療の選択から今後のフォローまでを討論する。適宜疑問点をピックアップし、次回の講義までに分担し、各自調べることで知識を深めていく方法である。彼らの模擬をみていて、学生でありながらその医療に対する知識の豊富さや思考力、積極性に驚かされた。アメリカの医学部入試では、学生のコミュニケーション能力や積極性に重きを置いて選抜されるため、自分の意見を明確に述べられる学生ばかりのようだ。こればかりを見て日本の学生と比較することは出来ないが、どうも日本の学生が見劣りしてしまった。国民性もあるが、日本でこの PBL を導入するのはなかなか至難の業である。私がハワイの学生と日本の学生を比較し感じたのは、日本の学生はもう少し医療に対するモチベーションを高くもってほしいと思う。

五つめは、そんなさわやかなハワイの空の下、一緒に研修した先生方と研修医 9 人、今回の海外研修に携わった方々。

偶然とはいえ、研修をともに完遂し、充実感とともにハワイを後に出来たことに感謝する。

今回の経験で私は自らを見直し、新たな風に鼓舞され、明日からの自分の医療に少しでも深みが増すことを願わずにはいられない。ハワイに幾重にもかかる虹が私と多くの人の架け橋になるよう自らを磨いていきたい。

人々が寝静まった真夜中の日本に降り立ち、心の奥にふつふつと沸き立つ新たな思いとともにまた歩み始める。